学位論文審査の結果の要旨（課程）

学位論文審査申請者氏名	河村　幸子
学位論文名	動物とふれあう環境教育の意義に関する研究ー動物園と学校における幼少期の実践を事例にー

学位論文審査終了年月日	学位論文審査の結果
令和 5 年 6 月 17 日	合　格 ・ 不合格
学位論文審査の結果の要旨は次ページ以降（別紙記載要領により作成のこと。）	

学位論文審査委員	主査　(自署) 朝岡幸彦	副査　澤　佳成
	伊丹　一浩	大倉　茂
	秋山　満	

※平成 29 年 10 月入学　農林共生社会科学専攻　農林共生社会科学大講座	
学位論文審査申請　令和 5 年 6 月 1 日	
学位論文審査委員の選出　令和 5 年 6 月 12 日	
学位授与の可否の議決（可・否）　令和 5 年 8 月 1 日	

東京農工大学大学院連合農学研究科

学位論文審査の結果の要旨

河村　幸子

本研究は、動物園と保育園を含む学校における幼少期の子どもの動物との「ふれあい」活動の現状と重要性を明らかにしたものである。

考察の素材を提供する事例として恩賜上野動物園と、公立小学校と保育園を取り上げ、動物園における「ふれあい」の環境教育と、地域ボランティアが支える学校飼育動物との「ふれあい」の教育的意義を明らかにしたところに本研究の新規性を見出すことができる。

動物福祉の面から今後はふれない「ふれあい」活動へと変化していくことが示唆された。しかし、幼少期の子どもには、五感で感じる直接体験が重要であることから、発達段階に応じた「ふれあい」活動の意義を提起している。

本研究では、幼少期の子どもが動物との接触体験をする場合、動物福祉を考慮し、モルモットのような家畜を用いるだけでなく、人との「ふれあい」を楽しむハズバンダリートレーニングを受けた動物であることの必要を述べている。人と動物が共生していくためには、野生動物や家畜、動物園動物という動物それぞれの種や個体の属性に合わせて、子どもの発達段階に応じた「ふれあい」活動の手法を工夫することにより、動物と環境への理解が深まり、環境保全意識をもった主体が形成される可能性があることを提起している。

以上のように、本論文は、多くの新しい知見を有すること、論文の内容、構成および公表論文数などから、本学位論文審査委員会は全員一致して、本論文が博士（農学）の学位論文として十分価値があるものと判断し、合格と判定した。